

ナースコール

★
看護職部門
入選

【神奈川県・藤巻由美子】

あまりの迅速さとナースコールを押した意図を理解してくれていたことに驚きました。「自分でします」と言った私に、微笑んで出て行った看護師が目標の存在になりました。座薬は恥ずかしいだろうという気遣いと、私の状態を把握していなければ、ナースコールⅡ痛み止めの要望とはならなかったでしょう。

看護師になって1年半が過ぎた頃、毎月訪れる生理の日に激しい腹痛を覚えるようになりました。どうしても耐えられなくなったあの月、職場の婦人科外来を受診。「子宮内膜症ね。取りあえず薬で小さくなるか経過をみるけど、手術も考えておいてね」と診断されそれから1週間も経たないうちに激痛が襲い、産婦人科病棟に直行。翌日手術となりました。

段取りをしている間は痛みもなく、翌日はすんなり手術に入るのだろうなど安心して眠りに就きました。ところが明け方4時頃に、急に痛みが襲って来ました。同室の人たちは気持ちよく寝入っているし、今夜は出産が多く忙しそうだし、朝一番の手術だからもう少し我慢しよう…。そう思いましたが、痛みによる吐き気もしてきたので、意を決し、ナースコールを押しました。すると、足音も感じさせず数秒で看護師が来てくれました。そして「自分で入れる？」と言って痛み止めの座薬を差し出してくれました。

とても小さなことでしたが、私には忘れられない出来事でした。それは、この入院で患者の気持ちと看護師の看護観を両方学ぶことができたからです。何回もナースコールを押す患者はまだいい。押せない患者は我慢や遠慮があったりする。それから私は、気兼ねなくナースコールを押せる信頼関係を築けるように担当部屋を訪室して、患者と話をし、情報収集しながら患者が何を求めているのかナースコールが押される前に気づけるような看護を心掛けました。今は検査担当として働いています。情報収集は今も続けています。簡単なようで実は難しい事ですが。